

環状瓶の製作技術とその系譜

名村 威彦

1. はじめに

須恵器には蓋坏や高坏のように古墳時代中期以降、大量に製作されるもののほかに、人間や動物、あるいは抽象化した象形物を写した特殊な形態をもつものがある。後藤守一氏はこれらを「異形須恵器」と呼んだが（後藤 1935）、これは小型の須恵器や動物・人物像が取り付けられた須恵器を含んだ名称であった。田辺昭三氏は「装飾付須恵器」、「子持須恵器」、「特殊な器形をもつ一群」としてこれらを整理したが（田辺 1981）、特殊と捉える器形の範囲や呼称は研究者によって異なっていた。こうした中で柴垣勇夫氏は研究史を踏まえ、祭祀用の土器であること、器形が器材や象形物を写しているものであること、出土例が全国でも20～30例程度のものであるという条件をもって「特殊須恵器」を定義した（柴垣 1987）。

本稿で焦点を当てる環状瓶も特殊須恵器の一種である。環状瓶とは埴瓶あるいは平瓶の胴部を環状に成形した須恵器であり、脚台部をもつものもある。後述する通り広島県西部の安芸地域で古くから発見されており、その特異な形態と分布の偏りから注目されてきた。しかし、個体数の少なさに加え、出土状況や年代が明確な資料が少なく、もっぱら分布状況を中心とした研究が主であった。本稿では環状瓶の製作技術の分析から形態の変化を理解し、編年を行った。その結果、古墳時代から奈良時代へと移り変わる転換期においても祭祀にまつわる文化に連続性が認められることが分かった。

2. 環状瓶に関する研究史

環状瓶についての記述は、古くは江戸時代に編纂された『三原志稿』に初見がある（青木 1912）が、時代や用途など研究資料としての情報はない。環状瓶が特殊な須恵器の一種として注目されるのは1960年代から1970年代に出版された諸書籍において紹介されてからである（檜崎 1966など）。広島県の環状瓶に焦点を当てて論考したのは河瀬正利氏である。河瀬氏は広島県内において鳥形瓶と環状瓶が7世紀前半代に、安芸地域と備後地域の境界付近で重なるように分布することを指摘し、両者を関連付け、周囲の遺跡の様相からその意義を総合的に考察した（河瀬 1985）。柴垣勇夫氏は須恵器のなかでも特殊な形態をした須恵器を集成し、環状瓶を含む13器種を特殊須恵器と設定し、分布や年代、意義を考察したが、ここで環状瓶は、6世紀末から7世紀前半に安芸地域で出土することを指摘した（柴垣 1987）。

こうした研究成果をうけて、環状瓶は古墳時代に広島県山間部にほぼ限定して出土する強い地域性を示すものであり、また、その造形から高い製作技術がうかがわれ、生産地も極めて限られると考えられるようになった（野末 1995）。一方で環状瓶は出土場所や使用状況などが詳しくわからないことが多いうえに、出土数も少ないといった資料的制約が大きく、環状瓶のみに焦点を当てた研究は少なかった。近年、調査によって出土する事例が増え、製作

技術や変遷について検討することが可能となった。また、これまで考えられていたよりも広範囲から出土するようになり、その分布状況も変化している。そこでまず環状瓶の基礎的な情報を整理しながら製作技術に焦点をあて形態の変化とその意義について考えたい。

3. 環状瓶の分析

(1) 分布

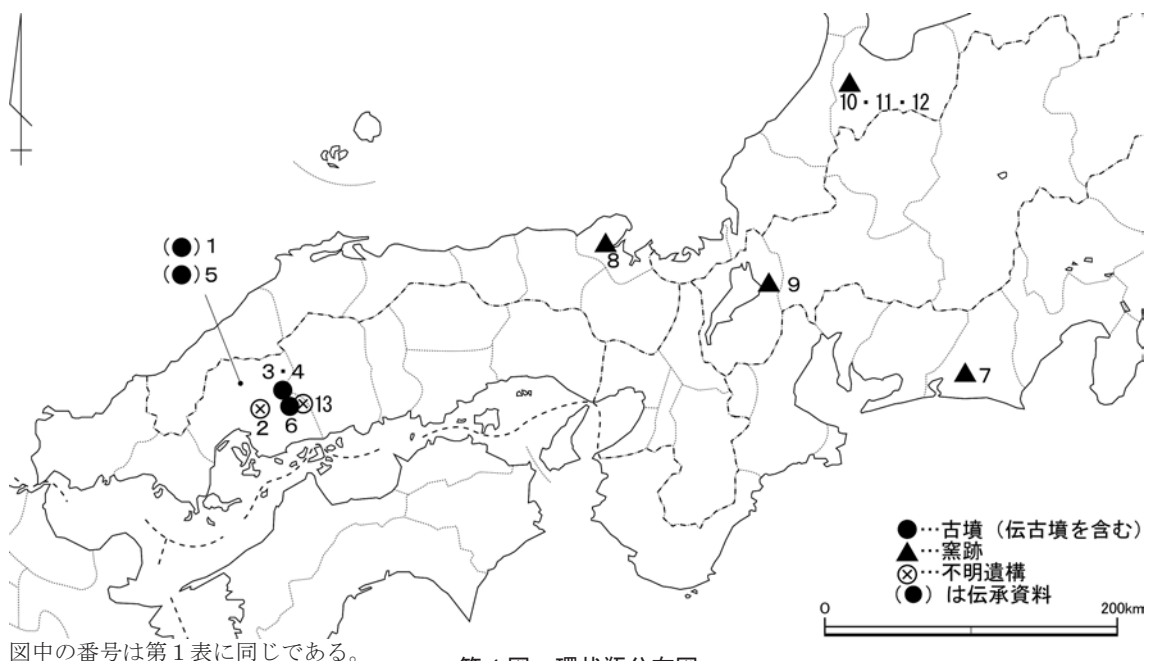
現在のところ環状瓶は13点を確認している。そのうち出土場所が判明するものは11点であり、安芸地域5点、丹後地域1点、近江地域1点、越中地域3点、遠江地域1点である（第1図・第1表）。出土場所がわかっていない2点については安芸地域から出土したものと伝えられている。なお、越中地域の3点についてはほぼ完形のものが1点、破片が2点であり、破片2点で1個体の可能性もあるが本稿では別個体として扱う。

伝承資料を含めると安芸地域にやや集中するが、越中地域や遠江地域など東西日本に散在することがわかる。

なお、環状瓶の各部名称については第2図に、計測範囲については第3図に示す。A面とB面は任意に決定している。また文様帯とは無文帯や突線によって画される、胴部に同心円状に施された文様の範囲とする。

(2) 出土遺跡と遺構の性格

調査によって確認された環状瓶は古墳、窯跡、不明遺構から出土している。古墳の埋葬施設から出土した例は亀裂がみられるものの完形品であることから副葬品であると考えられる。窯跡から出土した例ではすべて灰原から出土しており、欠損も多いことから廃棄品であることがわかる。出土した遺跡が不明な遊離品の多くは完形であるため古墳の埋葬施設に納められた副葬品であったと考えることができよう。



第1図 環状瓶分布図

第1表 環状瓶観察表

類型	遺跡名	全長	器高	外径	胴部厚	胴部幅	内径	口径	口頸部高	脚台部高	脚台部径	A面	B面	外側面	備考
1	I 名古屋市博物館所蔵		20.7	18.4	6.8	6.1	4.8	5.5	2.7			刺突列	刺突列	ケズリ出し突線	A: 焼成不良部分 伝広島出土
2	I 上ヶ原遺跡	(18.8)		18.5	5.6	6.7	5.0	-	-	-	-	刺突列	-	ケズリ出し突線	推: 外径・胴部厚 内径
3	I 千間塚古墳1		20.0	16.6	4.8	6.8	7.2	6.0	3.4			刺突列	-	-	A: 右半最大3.5mm 前後の亀裂
4	I 千間塚古墳2		22.6	18.6	3.2	9.0	5.8	6.0	4.4			刺突列	波状	-	全体に亀裂あり
5	I 倉敷考古館所蔵		22.8	19.4	4.8	4.7	10.8	5.6	4.1			刺突列	刺突列	刺突列	A: 底部付近最大 2mm前後の亀裂 伝広島出土
6	I (伝)丁田南古墳群		22.7	16.7	4.8	4.4	7.4	6.0	4.0	2.6	7.3	波状	波状	沈線と刺突列	推: 器高・口径、B: 最大4mm前後の亀裂
7	II 篠場瓦窯跡		31.4	21.4	5.8	6.8	10.0	9.2	7.2	2.8	9.6	波状	波状	波状	B: 大部分欠損、胴部 下端穿孔
8	III 阿婆田窯跡群	26.4	11.6	26.0	8.4	7.6	9.2	6.4	3.6	0.8		-	-	斜線	推: 内径 施文は一部のみ
9	III 菅江遺跡	(14.2)		15.9	5.0	4.0	6.1	-	-			無	-	無	推: 胴部厚、B: 欠損
10	III 大堤窯跡群環状瓶		25.2	22.9	7.7	7.2	7.4	5.5	3.3	1.1	6.3	沈線	-	無	推: 胴部厚、B: 欠損
11	III 大堤窯跡群胴部破片		-	-	-	-	-	-	-	-	-	沈線	-	-	
12	III 大堤窯跡群脚台部		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
13	- 福富町板鍋山		14.2	12.0	2.2	-	7.8	4.7	2.4			ヘラ描斜線	-	-	

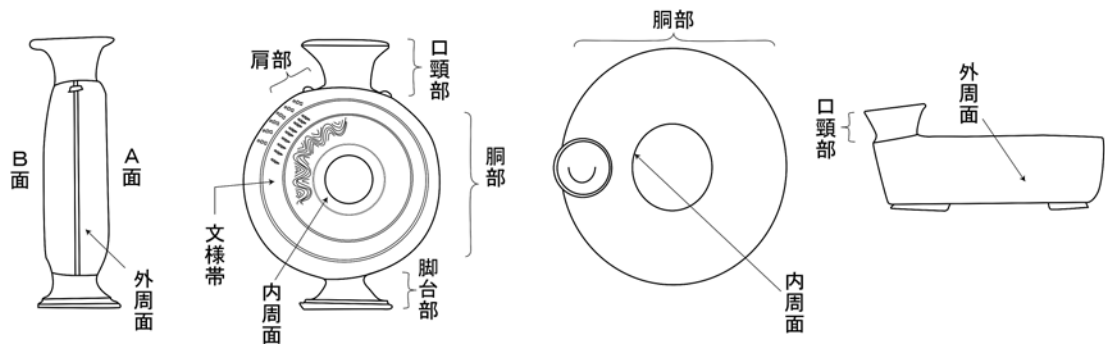
単位はcm

※推・・・推定復元値

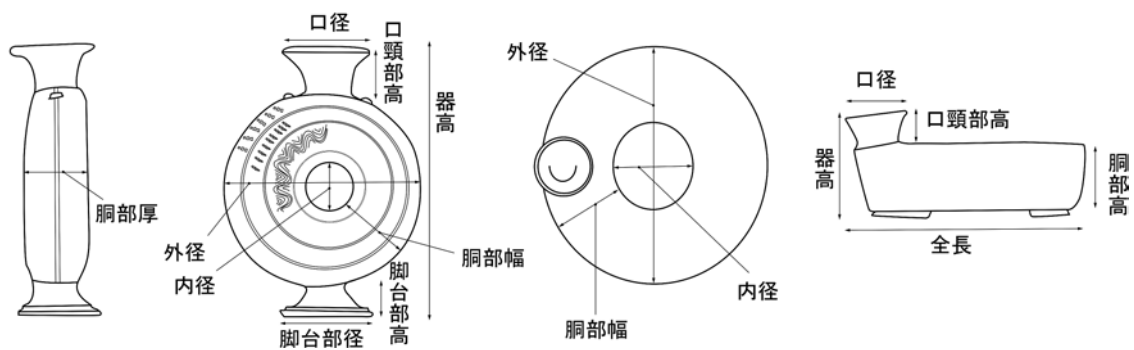
一: 不明

A・・・A面の備考 B・・・B面の備考

()は現存値



第2図 環状瓶各部名称



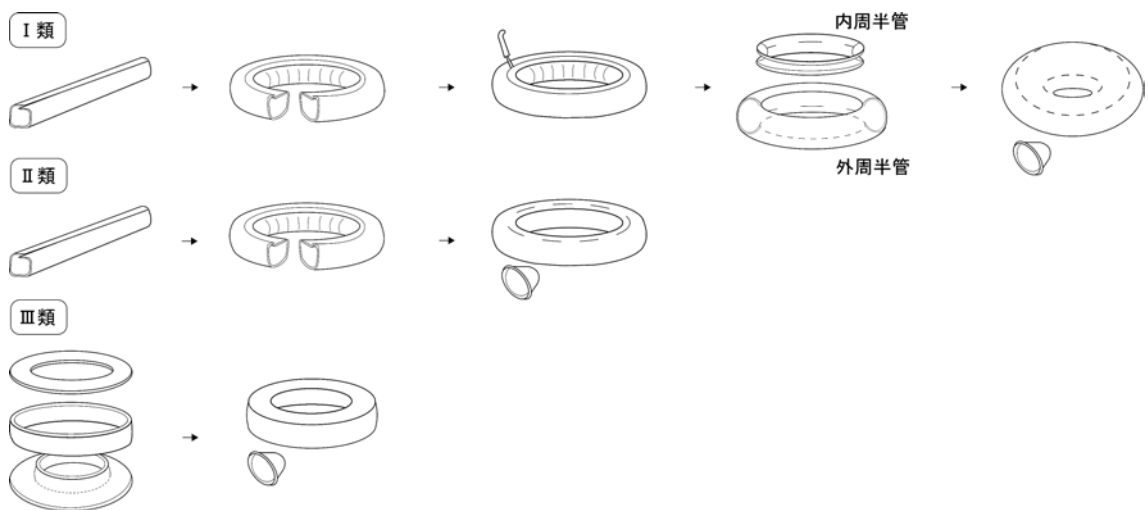
第3図 環状瓶計測範囲

(3) 製作技術の分類

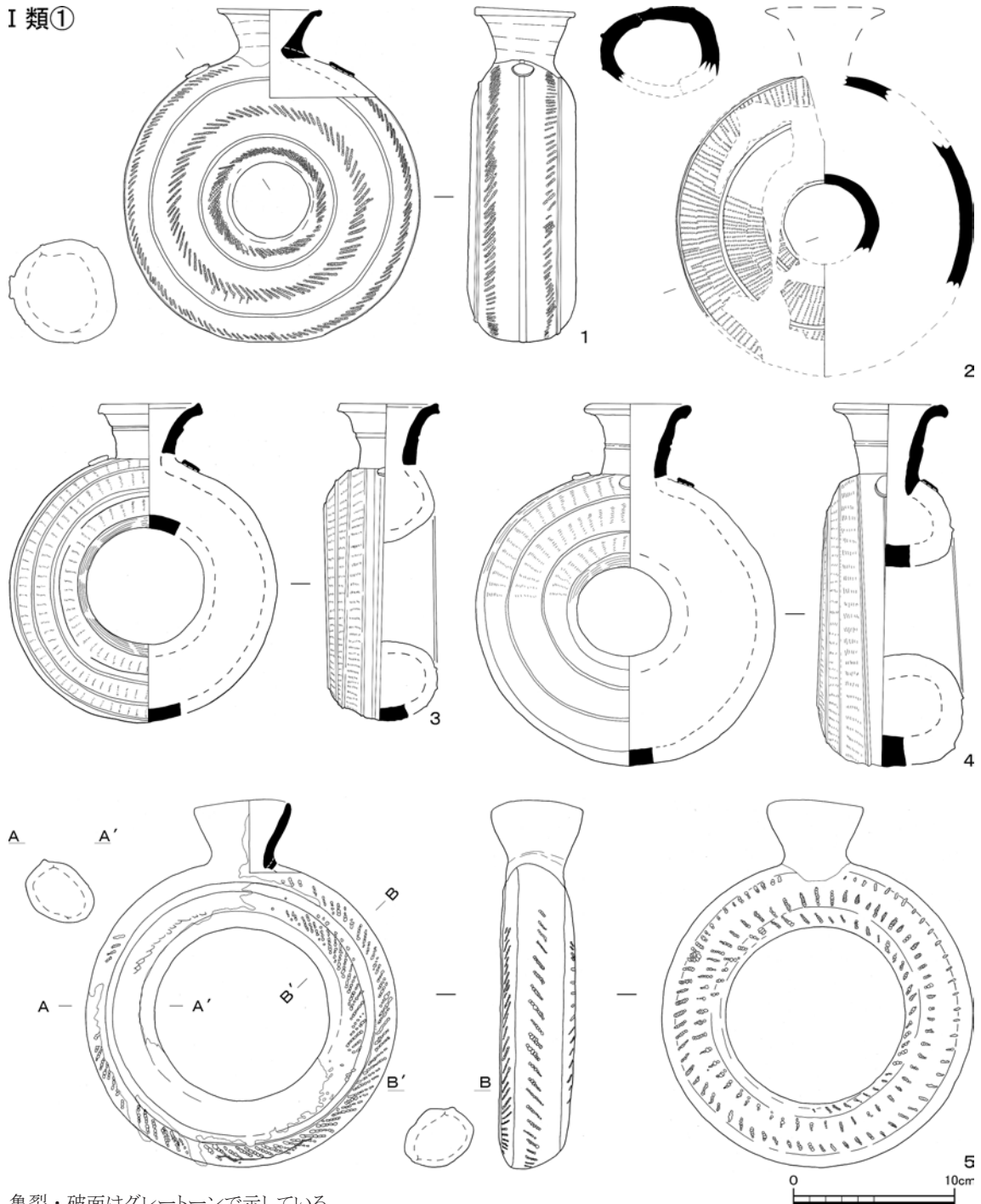
製作技術については胴部の成形方法に着目し、Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類の3類に分類した(第4図)⁽¹⁾。

Ⅰ類(第5図・第6図上) 粘土を引き伸ばし長方形の板を作り、それを丸めて管を作ったあと、円環状に成形する。円環状の胴部を内周部分(内周半管)と外周部分(外周半管)に分けるように切り離し、内外面を調整し、再接合する。Ⅰ類の環状瓶は名古屋博物館所蔵例(1)、上ヶ原遺跡例(2)、千間塚古墳例(3・4)、倉敷考古館所蔵例(5)、(伝)丁田南古墳群例(6)である。千間塚古墳は広島県安芸高田市向原町坂に所在する径7~8mの円墳である(高橋 1920)。墳丘は現在削平されており横穴式石室の一部が残っているだけである(河瀬 1985)。石室は、玄室と羨道の区別がなく、平面形が奥壁部から入口に向かってハの字形に広がる形態をしていたようである(河瀬 1985)。千間塚古墳では調査により環状瓶が2点出土しており、いずれも完形のⅠ類であると考えられるため、それぞれ千間塚古墳例1(3)、千間塚古墳例2(4)と呼称する。副葬品はほかに蓋2点、皿2点、高坏6点、脚付椀1点、長頸壺1点、脚付長頸壺1点、装飾付脚付長頸壺2点、平瓶1点、鳥形瓶1点があるが(中村 1998a)、これらの須恵器はⅡ型式6段階のものからⅢ型式2段階のものまで、実年代にするとほぼ7世紀全般におよぶものであることから、追葬があったと考えられる⁽²⁾。千間塚古墳からは複数の装飾須恵器が出土しており、何度かあった追葬の際に順次副葬されたと考えられ、2点の環状瓶も一定の時間を経て副葬されたと考えられる。上ヶ原遺跡は広島県広島市安佐北区可部町中野に所在する。環状瓶は配石遺構とされる用途不明の遺構から出土した(田村 2011)。環状瓶は破碎されたと考えられており、配石遺構周辺から出土した須恵器から古墳時代後期から奈良時代初頭まで何らかの祭祀が行われていたと考えられている(田村 2011)。(伝)丁田南古墳群例は広島県東広島市福富町の丁田南古墳群から出土したとされるが(福富町史編さん委員会 2007)、出土状況など詳細は不明である。

Ⅱ類(第6図下) 粘土を引き伸ばし長方形の板を作り、それを丸めて管を作ったあと、円



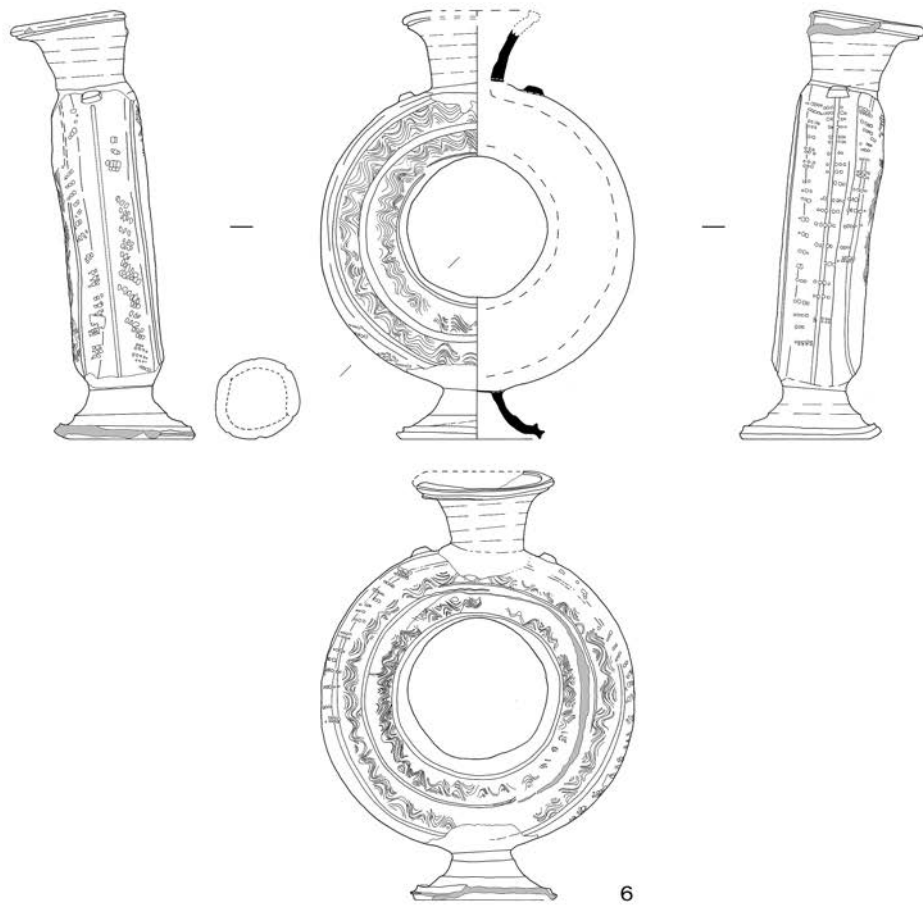
第4図 環状瓶分類模式図



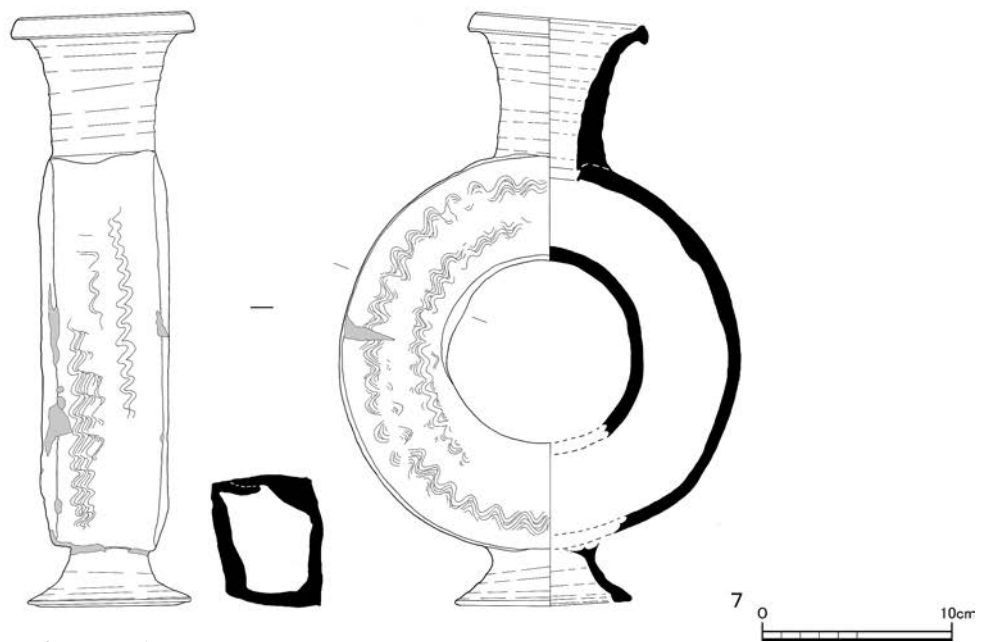
第5図 環状瓶 (1) (S=1/4)

環状に成形する。II類の環状瓶は篠場瓦窯跡例(7)である。篠場瓦窯跡は静岡県浜松市浜北区根堅に所在する、7世紀末から8世紀初頭の瓦窯跡である(武田 2013)。1~3号窯跡が検出されており、環状瓶は1号窯灰原から出土した。1号窯跡は有階無段式窖窯であり、煙道から焼成室にかけては良好に遺存していたが燃烧室が攪乱によって大きく失われていた(武田 2013)。1号灰原出土の須恵器はIII型式3段階にあたりと考えられ、環状瓶もほぼ同時期と考える。

I 類②



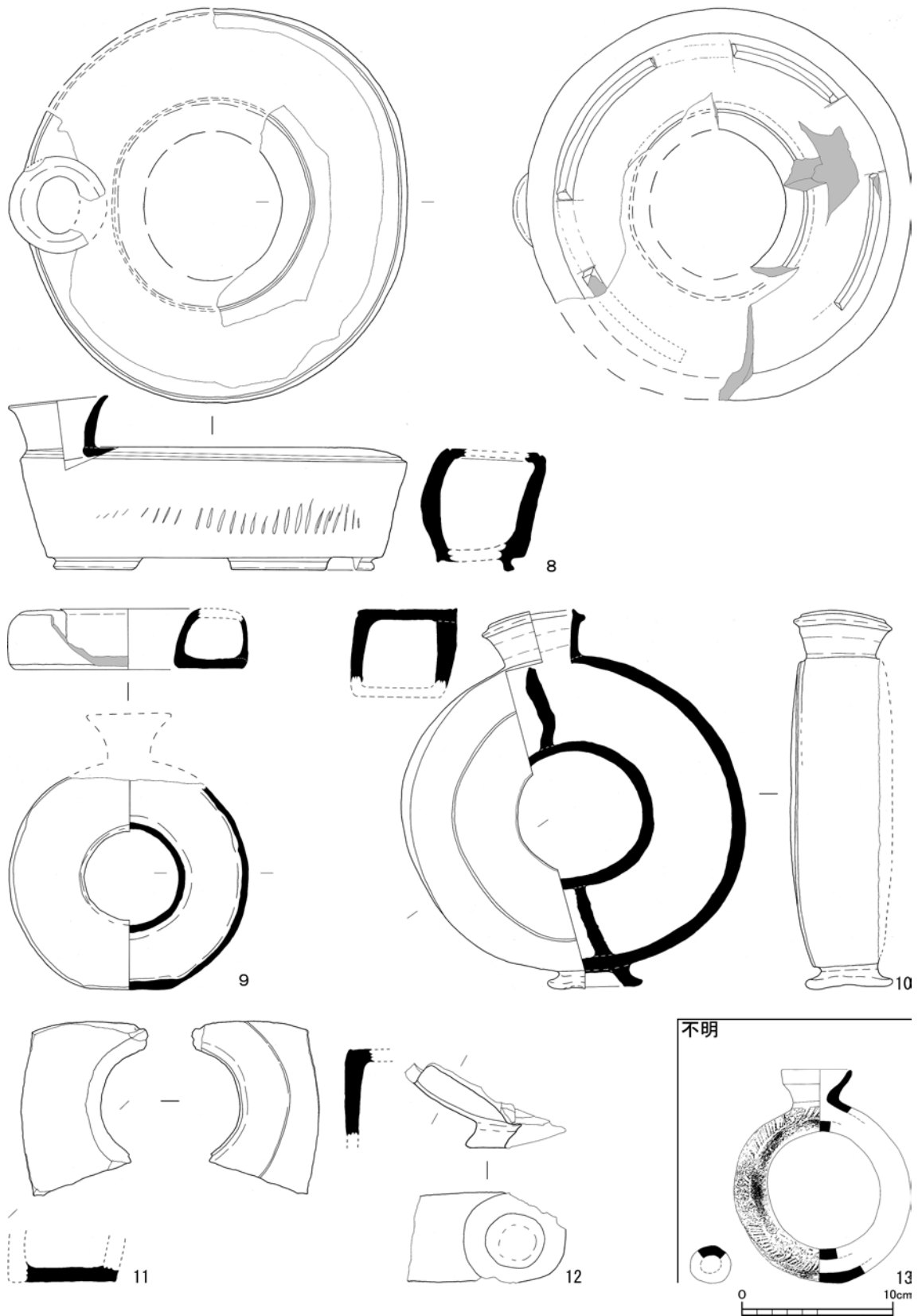
II 類



亀裂・破面はグレートーンで示している。

第6図 環状瓶(2) (S=1/4)

皿類



亀裂・破面はグレートーンで示している。
13は（中村1998d）より引用している。

第7図 環状瓶（3）（S=1/4）

Ⅲ類（第7図）粘土を引き伸ばし3枚の粘土帯を作り、そのうち1枚はL字状に折り曲げ⁽³⁾、残りはそのまま円環状につなげて調整する。円環状に成形した3つの部品を接合する。Ⅲ類の環状瓶は阿婆田窯跡群例（8）、菅江遺跡例（9）、大堤窯跡群例（10～12）である。阿婆田窯跡群は京都府京丹後市大宮町に所在する奈良時代後半の窯跡群である。出土した環状瓶は、「阿婆田窯跡群」（森 1991）では環状平瓶として報告されており、阿婆田窯跡群C支群の2号窯跡から出土した。2号窯跡は3段の段をもつ半地下式窖窯であるが窯体内から200個体におよぶ須恵器が出土しており環状瓶もそのなかの一つである。2号窯跡の操業時期は出土須恵器の器種構成や法量分布からⅣ型式3段階と考える。菅江遺跡は滋賀県米原市菅江に所在する奈良時代前期から後期前半にかけての須恵器窯跡である。環状瓶は1号窯跡の第一灰原から出土した。1号窯跡は前庭部と焚口が消失しており、1号窯跡に伴う第一灰原も完全には遺存していなかった（桂田 1987）。出土遺物の器種構成、型式からⅣ型式1～3段階と考える。大堤窯跡群は富山県南砺市福野に所在する安居窯跡群の支群の一つである。2号窯跡灰原から環状瓶が3個体出土した。報告書が刊行されていないため詳細は不明だが、8世紀前半の地下式須恵器窯とされている（富山県文化振興団埋蔵文化財調査事務所 2001）。大堤窯跡群からは全形が把握できる個体が1点と胴部の破片が1点、脚台部のみのものが1点出土しており、それぞれ、大堤窯跡群環状瓶（10）、大堤窯跡群胴部破片（11）、大堤窯跡群脚台部（12）とする。

環状瓶の製作技術は具体的に言及されたことは少なく、田中琢、田辺昭三両氏は、「おそらく、粘土紐を貼り合わせてまず長方形の板を作り、それを丸めて管を作ったのち、さらにそれを環状に成形したもの」（田中・田辺編 1977、71頁）とした。また、青木敬氏は「1枚の引き伸ばした粘土板を丸めて円筒を作り、その円筒の両端同士をドーナツ状に接合する」（青木 2016、28頁）方法を「巻き込み手法」、「細長い板を複数枚作成し、これらを上下左右に貼りあわせ、断面方形でドーナツ状の胴部となるように成形する」（青木 2016、28・29頁）方法を「組み合わせ手法」とした。田中・田辺両氏の示す製作技術や青木氏の巻き込み手法は筆者分類のⅡ類に、青木氏の組み合わせ手法は筆者分類のⅢ類に類似するものであるが、新たにⅠ類を設定した。Ⅰ類についてはX線CTスキャンを利用した分析によって内面における接合痕や調整痕が確認された（名村ほか 2017）が、一度、環状に成形したあとに切り離して内外面を調整することで環状に成形した際に生まれるゆがみや皺を調整し、器壁の厚さをそろえることができる。煩雑にみえるこうした製作技術を採用することで整美な環形を作り出し、焼成時に器形を大きく損なうような致命的な破損を防いでいたと考えられる。

4. 環状瓶の編年

環状瓶が出土した遺跡のなかで出土状況が詳細に判明しており共伴遺物などから年代が推定できる遺跡は、千間塚古墳、篠場瓦窯跡、阿婆田窯跡群、菅江遺跡、大堤窯跡群である。最も古い遺跡は千間塚古墳であるが、千間塚古墳は共伴遺物から長期間におよぶ追葬が予想される。先述したように環状瓶2点に加え鳥形瓶や装飾付脚付長頸壺が2点と装飾須恵器が

西暦	600			650			700		750	
須恵器編年 (中村2001)	Ⅱ-4	Ⅱ-5	Ⅱ-6	Ⅲ-1	Ⅲ-2	Ⅲ-3	Ⅳ-1	Ⅳ-2	Ⅳ-3	
千間塚古墳	—————									
篠場瓦窯跡							—————			
阿婆田窯跡群									—————	
菅江遺跡							—————			
大堤窯跡群							—————			

第8図 遺跡から出土した環状瓶の存続幅

比較的多数出土したことからは一度の埋葬ですべての装飾須恵器が副葬されたと考えるよりは、複数回あった追葬のなかで順次、装飾須恵器が副葬された可能性が高いといえる。その意味では千間塚古墳は長期間追葬が行われ、かつ、たびたび装飾須恵器が副葬された特異な古墳とみることができるが、出土した時の副葬品の配置状態などはわからない。そのため、複数回の追葬のなかで順次、装飾須恵器が副葬された場合どの時期の埋葬に伴って環状瓶が副葬されたかを考えるのは難しい。年代が推定できる最も古い環状瓶である千間塚古墳例から最も新しい阿婆田窯跡群例まで、単純に環状瓶の製作期間や副葬された期間を示すことは難しく、その幅は千間塚古墳に遅い段階で副葬されたと考えるとⅢ型式2段階からⅣ型式3段階までのおよそ75年間、千間塚古墳に早い段階で副葬されたと考えるとⅡ型式6段階からⅣ型式3段階までのおよそ175年間と非常に差が開くものとなり、上限は確定できない。しかし、後述するように千間塚古墳で出土した2例は先後関係をもつと考えられ、千間塚古墳例よりも古いと推量できる環状瓶もあることから7世紀前半には環状瓶が製作されていたことが想定できる。下限については現在のところⅣ型式3段階の遺跡と考えられる阿婆田窯跡群があるため8世紀半ばまでは確実に製作されていたといえる。さて、環状瓶が出土した遺跡の年代から環状瓶の新古関係を検討すると古いものから順に千間塚古墳例(3・4)、篠場瓦窯跡例(7)、菅江遺跡例(9)と大堤窯跡群例(10~12)、阿婆田窯跡群例(8)である。この新古関係から、

- ①時期が降るにつれて胴部断面形が円形から四角形になる。
- ②脚台部の創出と退化がおきる。
- ③文様帯を区分する部分がケズリ出し突線から沈線へと変わり無文帯になる。

という変化がみられ、また傾向としてうかがえるものは

- ①文様表現が櫛歯刺突文から波状文へと変移し、最終的には無文化する。
- ②把手の名残として肩部に貼り付けられる小粘土塊の装飾化や消失がおきる。

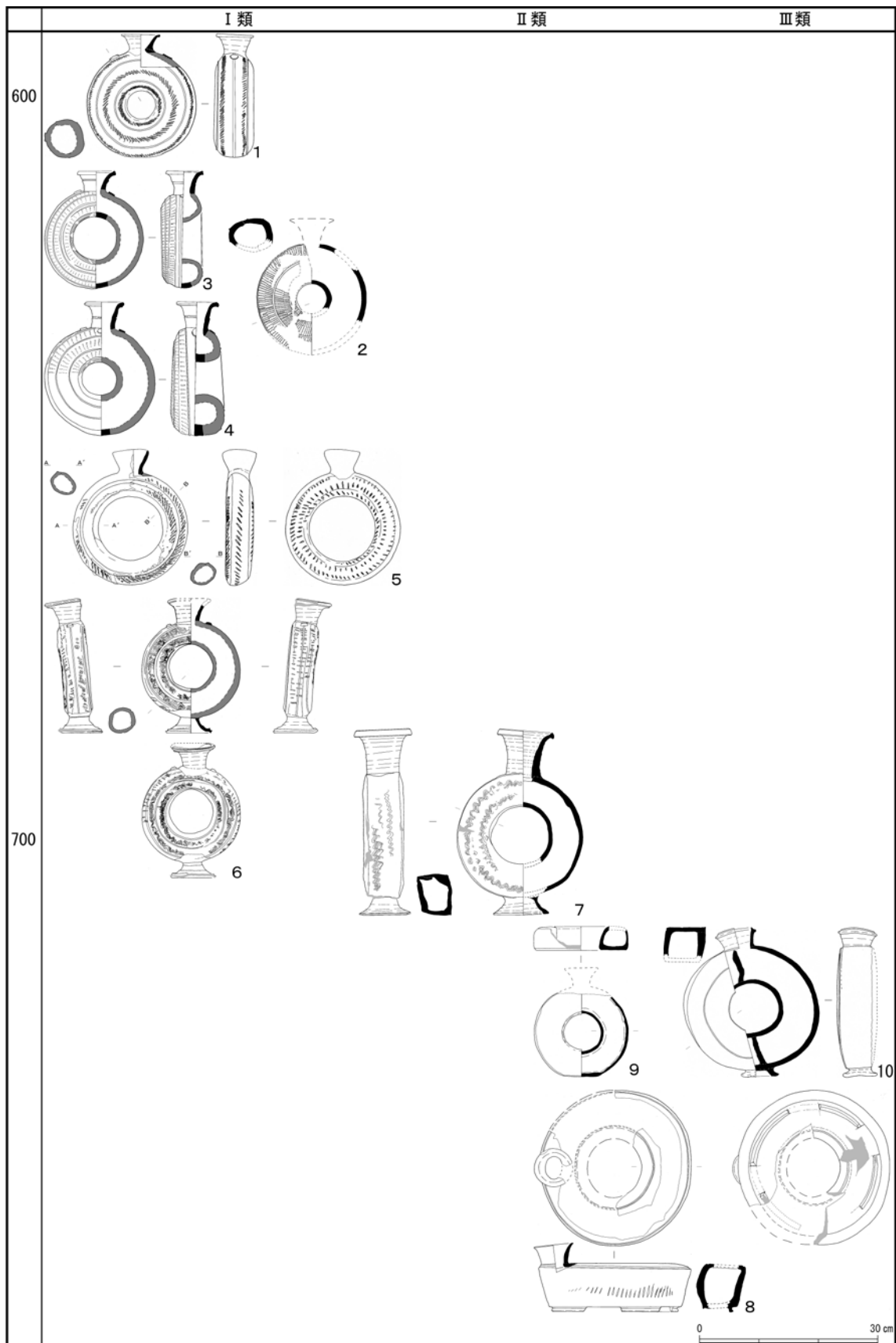
という推移がある。これらの点を踏まえて環状瓶の相対的な新古関係を検討していく。

まず千間塚古墳からは環状瓶が2点出土しているが、先述の通り順次副葬されたと考え、時期差を想定する。環状瓶の時期的な差異のなかで最も特徴的な点は胴部断面形である。古い環状瓶ほど丁寧に断面が円形になるように胴部を成形しているが、新しくなるにつれて成形が粗雑になり稜を持つ四角形に変化していく。千間塚古墳例2(4)は千間塚古墳例1(3)よりも胴部に稜がみられ、断面四角形に近い。また把手の痕跡として残っていると考えられる肩部の小粘土塊についても4つになっており、文様意匠化した後出的要素と考える。さら

に千間塚古墳例2(4)のB面は沈線にはさまれた波状文であり(中村 1998a)文様のにも後出の要素を持っている。このことから千間塚古墳例1(3)が古く千間塚古墳例2(4)が新しいと考える。同様に検討した場合、名古屋市博物館所蔵例(1)は胴部断面形が千間塚古墳例1(3)よりも正円形に近く、またA面B面ともに櫛歯状工具による刺突文が施文される。文様帯を区分する部分は千間塚古墳例1(3)と同じくA面B面ともにケズリ出し突線であり肩部の小粘土塊も円形で2つ貼り付けられる。千間塚古墳例1(3)と共通する要素をもつと同時に古いと考えられる要素をもつため名古屋市博物館所蔵例は千間塚古墳例1(3)より古いと考える。上ヶ原遺跡例(2)は胴部断面形が楕円を呈す。A面の文様は櫛歯状工具による細かい刺突文が施されており、文様帯を区分する部分は細いケズリ出し突線である。これらの要素は千間塚古墳から出土した2点と極めて類似している。B面が欠損しており文様構成などが不明であるが、千間塚古墳から出土した2点とほぼ同時期であると考えられる。次に(伝)丁田南古墳群例(6)である。胴部断面形は少し稜のある円形であり、また脚台部をもつが、この脚台部は篠場瓦窯跡例(7)のものと同程度の高さである。文様帯を区別する部分には沈線が施される。両面ともに櫛歯状工具による波状文が施されており、外周面には名残のような櫛歯状工具による刺突文がみられる。肩部の小粘土塊は貼り付けたあとに四角に切り離されており、装飾性をもつ。胴部断面形、脚台部をもつこと、肩部の小粘土塊の形骸化という様相は千間塚古墳例(3・4)よりは後出する例であることを示すが、胴部断面形の曲面や文様帯を区切るケズリ出し突線が変化した形で沈線として残っていたり、櫛歯状工具による刺突文がわずかに残っていたりする点については篠場瓦窯跡例(7)よりは古いと判断できる。次に倉敷考古館所蔵例(5)である。胴部断面形は稜のある楕円形だが脚台部を持たない。文様化した突線や両面ともに櫛歯状工具による刺突文がはっきりと施されること、胴部断面形の形態や胴部の文様が退化している点から、千間塚古墳例(3・4)よりは後出すると考える。また、脚台部を持たないことや櫛歯状工具による刺突文、文様化しているものの突線をもつ点では(伝)丁田南古墳群例(6)や篠場瓦窯跡例(7)よりは古いものとみなせる。最後に福富町板鍋山例(13)である。胴部断面形および製作技術の詳細が確認できていないため検討するのが難しい。胴部断面形は図面上、正円に近い形に復元されている(中村 1998d)ため、古い様相を示している可能性があるが、文様構成は沈線の間にヘラ描きの斜線文が施されている(中村 1998b)ことから、ケズリ出し突線が施される段階よりは後出する可能性もある。いずれにしても確証があるものではないので、ここでは位置づけを保留したい。以上の検討をまとめたものが第9図である。

5. 環状瓶の変遷と製作技術の系譜

環状瓶が出土した遺跡は出土場所や遺構の性質が不明のものを除くと、7世紀代では古墳の埋葬施設からしか出土していない。これは環状瓶が葬送祭祀に関して限定的に製作されたことを示す。しかしまた、完形品の多くに亀裂がみられ、胴部下端に穿孔がみられる例もある。したがって環状瓶は葬送祭祀の場においても液体を内部に入れて注いだり供えたりする



図中の番号は第1表に同じである。
 完形の断面は想定のためグレートーンで示す。

第9図 環状瓶編年図 (S=1/10)

といった儀礼に使用されたものではないと考える。7世紀代の環状瓶の多くは胴部に精緻な文様が施され、入念な製作技術によって環状の形態を崩さないように製作された。このことから環状の形態と精緻な施文をもつ特殊な須恵器という外見的な要素が重視されたことが推察される。また環状瓶は管状の胴部を中空に保ったまま環状に製作された。このように複雑な形態の須恵器を製作することは非常に難しく、高度な焼成技術が必要である。千間塚古墳例（3・4）や（伝）丁田南古墳群例（6）のように多くの環状瓶は完形品であっても器面に亀裂がみられることが多々ある。こうした、製作に失敗したとみなされる製品が副葬されることについて、あえて失敗した須恵器を副葬したという見方も可能ではある。しかしⅠ類のように煩雑さを感じるほど丁寧に製作していることから、焼成の難易度が高く、環状の形態を維持したまま完成させることが難しかったため、亀裂の入ったものでも副葬されたと考える。一方で、8世紀に入ってからの環状瓶は環状の形態であるものの文様のほとんどは喪失しており、外見的な要素を重視した環状瓶とは大きく異なる様相を示す。さらに大堤窯跡群環状瓶（10）については胴部を二分するために付属させた仕切り板となる粘土板がみられ、内部に液体を入れるために製作されたと推量できる。また、菅江遺跡例（9）のように脚台部が喪失し、平底になったものや阿婆田窯跡群例（8）のように平瓶の形態をとるものがある。これらは7世紀代の環状瓶に多い丸底のものや脚台部をもつものより安定して据えることができる。つまり、こうした例は内部に液体を入れるといった実用的な機能を考慮して製作された可能性が高い。7世紀代にみられる外見的な属性を重視した環状瓶と8世紀代に入ってみられる実用的な機能を考慮した環状瓶の二者はその製作目的に明らかな差異が認められるのである。ここで環状瓶の編年と製作技術の関係をみてみると、7世紀代にⅠ類からⅡ類へ、8世紀を境にⅡ類からⅢ類へと変化していることがわかる（第9図）。Ⅰ類からⅡ類への変化は、Ⅰ類で行う胴部の切り離し工程と内外面の調整工程を省略した結果とみなすことができる。一方でⅡ類からⅢ類への変化は3つの部品を組み合わせる、それまでとは全く異なる方法で製作されている。このことからⅠ類からⅡ類への変化はⅠ類を簡略化することでおきるものであり、製作技術を継承している一方で、Ⅱ類からⅢ類への変化は技術的な断絶が考えられる。同様の傾向は文様や形態の変化でもみられる。文様についてはⅠ類でも古い段階のものは櫛歯による刺突文が、新しい段階のものは波状文が施される。Ⅱ類の環状瓶には簡略化されてはいるが、波状文で飾るという要素が残されている。またⅠ類の新しい段階から登場する脚台を持つという要素も継承している。しかし、Ⅲ類の環状瓶には文様がほとんど施されず、加飾性はない。また形態としても脚台部が矮小化したものや喪失したものの、平瓶の形態をとるものなど多様化する。くわえて大堤窯跡群環状瓶（10）のように胴部内面に仕切り板を作るなど、それまでの環状瓶にはみられない要素も現れた。こうした点から、文様や形態の変化からもⅠ類からⅡ類への系譜の連続性とⅡ類からⅢ類への系譜の断絶があるといえる。つまり製作目的の差異と製作技術の断絶はいずれもⅡ類の環状瓶からⅢ類の環状瓶への変化がおこる、7世紀と8世紀を境にみられる現象なのである。Ⅰ類からⅡ類への変化は製作技術や施文など環状瓶に元来与えられた意義を理解した中での変化であると

考えられる。それに対し、Ⅱ類からⅢ類への変化は環状の形態と稜を持った胴部断面形態だけを模倣したのである。そのため製作技術や形態が大きく異なっていたのである。このように環状瓶は外見的な属性を重視した環状瓶から実用的な機能を考慮した環状瓶へと形態や製作技術を変化させながらも長期間、広範囲にわたって製作され続けた。

6. 環状瓶の拡散とその意義について

(1) 環状瓶の創出

最初期の環状瓶は安芸地域の中でも古代の備後地域との境界線付近にあたる、安芸東端域で製作された。この安芸東端域では、備後地域との境界線と想定される沼田川が三原湾に流入しており、その河川沿いは古墳時代後期から奈良時代にかけて特異な様相を示す地域である。その特異性については先学により指摘されている（小都 1986）が、竜山石製の家形石棺や畿内型の巨石横穴式石室を持つ後期古墳が集中すること、それらに近接する白鳳寺院である横見廃寺の存在などが挙げられ、この横見廃寺は『日本書紀』における造船の記事などから倭漢氏と深い関係があるとされている（山崎 1983）。たしかに『日本書紀』によると推古天皇 26(615)年と白雉元（650）年に2度造船の詔が安芸に出されており、このうち白雉元（650）年の詔は倭漢氏が派遣されている（小島ほか 1994）。くわえて『倭名類聚抄』において安芸地域の沼田郡に造船の木材を切り出したと想定される「船木郷」があることから、安芸地域における造船事業は木材を沼田郡で切り出し、沼田川を経由して三原湾の港に運び行っていたと考えられる。そしてこの造船事業に必要な労働力は安芸国沼田郡・高田郡・高宮郡にまたがるのが想定されるが（山崎 2011）、これは環状瓶の分布地と重なる。

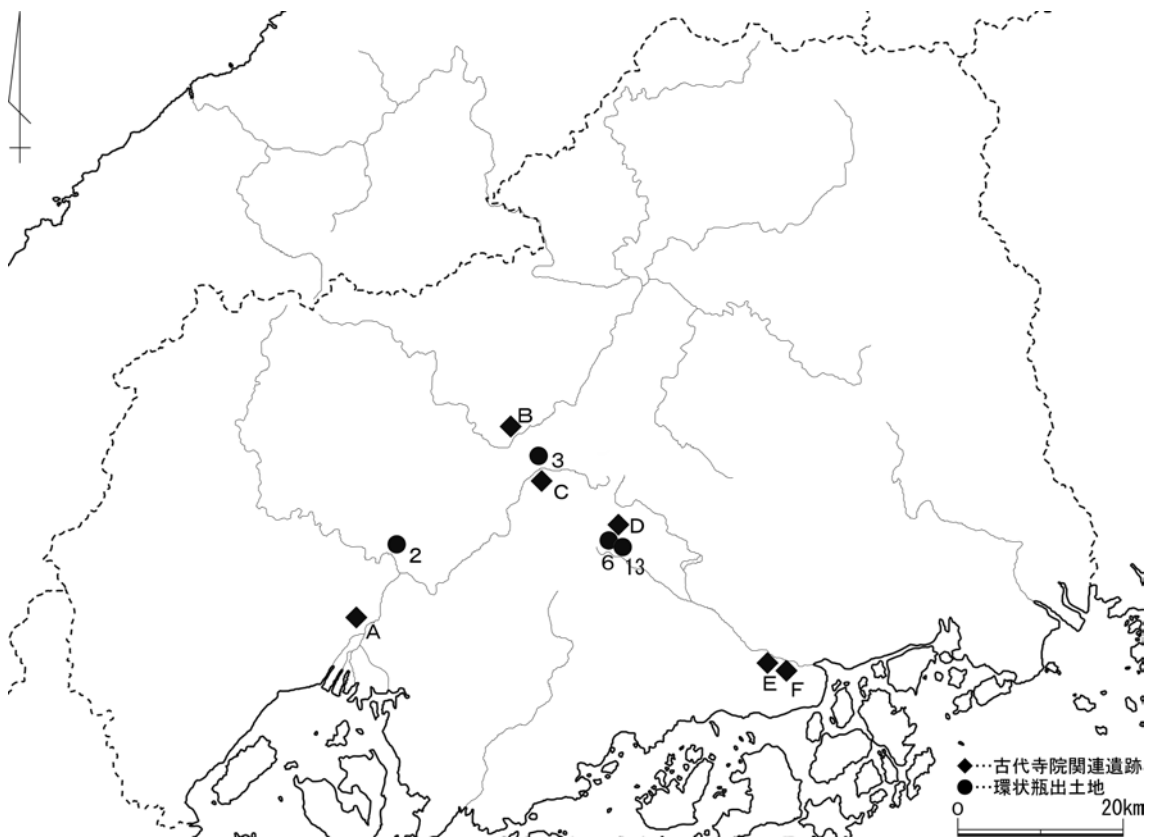
安芸地域で出土した環状瓶の中でも古く位置付けられる個体が出土した千間塚古墳に近接して横見廃寺と同じく7世紀半ばに建立されたと考えられる明官地廃寺や正敷殿廃寺がある。横見廃寺と明官地廃寺は伽藍を備えた本格的な寺院としては安芸地域の中でも最初期のものであり、瓦範の移動や「丸瓦被覆法」と呼ばれる特殊な瓦の製作技法が共通してみられるなど深い関係性が指摘されている（妹尾 2005）。正敷殿廃寺については詳細は不明であるが「丸瓦被覆法」が確認されており、明官地廃寺と繋がりが深い（伊藤 1987）。特に「丸瓦被覆法」と呼ばれる瓦の製作技法は百済や新羅の瓦において数多く認められ、その根源が韓半島南部に求められることが想定されている（舘 1978、中山 2005）。この「丸瓦被覆法」と呼ばれる技法は大和地域を除く畿内の一部でも見られるが（大脇 2007）、畿内では主流とならないこの技法が安芸地域の古代寺院に広く採用されることから畿内を経ずに直接安芸地域に流入してきた渡来系工人がいたことが示唆されている（妹尾 2005）。同じように千間塚古墳とほぼ並行する時期に製作されたと考えられる環状瓶が出土した上ヶ原遺跡の所在する太田川流域にも、「丸瓦被覆法」が確認された光見寺廃寺が所在する（妹尾 2016）。千間塚古墳や上ヶ原遺跡の例より少し遅れる、丁田南古墳群が所在する福富町周辺では古代寺院は確認されていないが、7世紀後半の須恵器が出土した吹出窯跡がある（妹尾 1994）。この窯跡からは瓦も採集されているが、横見廃寺に近接してその瓦を供給した三王社境内瓦窯跡が

所在する（松本1972、1973、1974）ように、瓦窯跡に近接して古代寺院が造営されることは多く、吹出窯跡周辺にも寺院が造営されていた可能性がある（妹尾 1994）。

河瀬氏は環状瓶の祖型と考えられる土器が韓半島で出土していることや周囲の遺跡の様相から環状瓶が渡来系の集団と深く関係するとしているが（河瀬 1985）、この集団とはやはり三原湾の港を通じて直接安芸地域に流入し造船や寺院の建立など大規模な事業に参画していた渡来系技術者集団であったのではないだろうか。環状瓶が安芸東端域で創出されることとなったのはこうした渡来系技術者集団の流入とその活動が背景にあった可能性があるだろう。ただ、韓半島で見られる環状瓶は三国時代百濟地域や三国時代新羅地域から出土しており（金ほか 1979）、安芸地域に出現した環状瓶とは時間的な隔たりが大きい。また、韓半島の環状瓶は平瓶が変化した形態をもつ胴部に文様を施さない質素な外観であり、埴瓶が変化したと考えられる形態をもち装飾的な文様が施された安芸地域の環状瓶とは系譜が異なる可能性がある⁽⁴⁾。環状瓶に施される文様や創出の背景についてはさらなる検討が必要である。

（2）環状瓶の拡散

7世紀末から8世紀にかけての環状瓶は遠江地域、越中地域、近江地域、丹後地域で出土しており出土地域が大きく広がる。これらの環状瓶はすべて窯跡から廃棄された状態で見つかる。7世紀代の環状瓶の多くが古墳から出土したことから窯跡出土の資料が周囲の古墳や横穴などの墳墓に副葬するために製作されたものである可能性を示すが、古墳の築造が終



A. 光見寺廃寺 B. 明官地廃寺 C. 正敷殿廃寺 D. 吹出窯跡 E. 三王社境内瓦窯跡 F. 横見廃寺
数字は第1表に同じである。

第10図 安芸の環状瓶と古代寺院

焉して以降も製作されたことから必ずしも副葬品として製作されたとは限らないと考えられる。阿婆田窯跡群を調査した森正氏は環状瓶について「2号窯窯体内出土土器の器種構成をみると、薬壺形壺や鉄鉢形鉢など役所・寺院等、ある程度供給先が限定できるものを含んでおり、これらと同列に扱うことが妥当かと考える」（森 1990、22頁）としており、また遠江地域でも篠場瓦窯跡のように焼成された瓦とともに環状瓶が出土していることから寺院に搬入されていた可能性が高いといえる。

先述の通り環状瓶が創出された安芸地域でも寺院との関係性が深いことが想定できる。古墳の造営が終焉する時期と前後して、副葬品として製作されてきた環状瓶がその役割を変え、仏教祭祀のために製作されるようになっていったのである。篠場瓦窯跡例が寺院に搬入された可能性が高いことを考えると、Ⅱ類の環状瓶が製作されたときにはすでに役割を変化させていたと考えられる。Ⅰ類の加飾性の強い環状瓶からⅡ類のやや形骸化した環状瓶への変化が副葬品から仏教祭祀の器物への変化を反映していると考え、7世紀の後半から7世紀末、各地で寺院が多数建立される時期に合わせるように性質を変化させたと考えられる。

（3）まとめ

これまで環状瓶は中国地方に特徴的な地方色の強い須恵器と考えられてきており、7世紀前半のものと考えられてきた。確かに7世紀代の環状瓶で古墳からの出土が確実なものは広島県西部の安芸地域に限られるが、窯跡出土資料を合わせると時間的には途切れることなく8世紀中ごろまで製作されたことがわかる。出土数が少ないこともあり、分布状況からは出土地域間のつながりを把握したり、時間的な差異からの伝播を検討したりすることは難しいが、東西日本から出土することから、7世紀代に安芸地域で創出され、8世紀を境に全国的に製作されていたといえる。こうした状況から副葬品として創出された加飾性の強いⅠ類の環状瓶が形態や製作技術を変化させながら、Ⅱ類の環状瓶が製作された時期までに寺院で使用される器種として製作され、Ⅲ類の環状瓶の時期には全国的に製作されたのである。飛鳥寺の塔心礎埋納物の例にみられるように（田澤 1958）、古墳祭祀を中心とした時代から平城京が成立し仏教を中心とした奈良時代へと大きく文化が変化していく中で、古墳祭祀の一部が仏教的な祭祀の中に受け入れられていったことを示しており、新たに渡来した文化の中で過去の文化のすべてが排斥されたのではなく変容しながら受け入れられていったことがわかるのである。

7. おわりに

本稿は、平成28年度広島大学文学部人文学科地理学・考古学・文化財学コース考古学専攻の卒業論文として執筆した内容をもとにまとめたものであります。本稿を執筆するにあたり、広島大学文学研究科の野島永教授には細部に至るまでご指導いただきました。また、このように公表の機会を設けていただきました。記して深く感謝いたします。同研究科の古瀬清秀名誉教授には本稿執筆にあたりご助言をいただきました。深謝いたします。同研究科のウェルナー・シュタインハウス特任准教授には英文サマリーの添削など、ご指導いただきました。

記して感謝いたします。永野智朗氏、真木大空氏の両畏友には古代寺院に関する記述や資料収集において多大なご協力を頂きました。ありがとうございます。また、本稿執筆のために資料調査として各機関の皆様にお世話になりました。倉敷考古館長の香川俊樹様、名古屋市博物館の川合剛様、南砺市埋蔵文化財センター所長の松平信隆様、同センターの山森伸正様、中川直美様、南砺市ブランド戦略部部長の米田聡様、米原市教育委員会事務局歴史文化財保護課課長の桂田峰男様、静岡県埋蔵文化財センターの中川律子様、広島市文化財団文化科学部文化財課の大室謙二様、京都府埋蔵文化財調査研究センターの伊賀高弘様、貴重な資料を調査させていただくとともに、図面の掲載許可を頂きました。深く感謝申し上げます。また韓半島の資料については広島県立歴史民俗資料館の村田晋様にご紹介いただき、岡山理科大学の亀田修一先生に詳細をご教示いただきました。記して深謝いたします。

註

- (1) なお、福富町板鍋山例（13）は実見できておらず、文様および胴部断面形などの詳細が不明であるため分類を留保している。
- (2) 本稿で扱う須恵器の編年は中村（2001）文献に依拠している。
- (3) 第4図の模式図ではⅢ類の「L字状に折り曲げた部品」を、内周面とA面がつながった部品として表現しているが外周面とA面がつながった部品として製作している個体もある。前者は菅江遺跡例（9）、後者は大堤窯跡群例（10～12）と阿婆田窯跡群例（8）である。
- (4) 近年、韓半島で新たな環状瓶の資料が出土している。報告書（翰林大學校博物館 1990）によると8世紀代の資料であり、胴部断面形は四角形を呈する。日本のものと類似するが文様など細部では差異が大きく関係性は不明である。

挿図・挿表出典

第1～4図、筆者作成。第5図、1は名古屋市博物館所蔵。同館の許可を頂き筆者実測、2は広島市文化財団所蔵。田村（2011）文献をトレースしたものに同文化財団の許可を頂き筆者実測および加筆、3・4は中村（1998c）文献をトレースしたものに筆者加除修正。5は倉敷考古館所蔵。同館の許可を頂き筆者実測。第6図、6は広島大学考古学研究室所蔵、筆者実測。7は静岡県埋蔵文化財センター所蔵。武田（2013）文献をトレースしたものに同センターの許可を頂き筆者実測および加筆。第7図、8は京都府埋蔵文化財調査研究センター所蔵。森（1991）文献をトレースしたものに同センターの許可を頂き筆者実測および加筆、9は米原市教育委員会事務局歴史文化財保護課所蔵。桂田（1987）文献をトレースしたものに同教育委員会の許可を頂き筆者実測および加筆、10～12は南砺市埋蔵文化財センター所蔵。同センターの許可を頂き筆者実測。13は中村（1998d）文献から引用。第8～10図、筆者作成。第1表、筆者作成。

引用・参考文献

- 青木 敬 2016 「寺院造営技術からみた白鳳」『国学院雑誌』第117巻第12号、国学院大学、17～35頁。
- 青木充延 1912 「古器」『三原志稿』三原志稿出版會、303頁。
- 伊藤 実 1987 『明官地廢寺跡』—第一次発掘調査概要—、広島県埋蔵文化財センター。
- 大脇 潔 2007 「一瓦一会」瓦当側面接合技法—SR技法—の軒丸瓦について」『三宅雄一氏・東鳥取小学校・東鳥取公民館寄贈瓦報告書』阪南市教育委員会、43～66頁。
- 小澤 毅 1985 『明官地廢寺跡試掘調査概要』吉田町教育委員会。

- 小都 隆 1986 「尾原川流域の横穴式石室」『広島』日本の古代遺跡26、保育社、133～141頁。
- 桂田峰男 1987 『菅江遺跡発掘調査報告書』山東町教育委員会。
- 河瀬正利 1985 「広島県出土の鳥形須恵器」『芸備古墳文化論考』芸備友の会、1～26頁。
- 金 元龍・岡崎 敬・韓 炳三 1979 『韓国古代』世界陶磁全集17、小学館。
- 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民ほか 1994 『日本書紀』新編日本古典文学全集2、小学館。
- 後藤守一 1935 「須恵器」『陶器講座』第一巻、雄山閣、1～50頁。
- 富山県文化振興団埋蔵文化財調査事務所 2001 『富山県福野町 安居窯跡群発掘調査レポート』富山県文化振興団埋蔵文化財調査事務所。
- 蒔 貞連 1978 「百済蓮華紋瓦当編年に関する研究」関口広次訳、小田富士雄編『古文化談叢』第4集、九州古文化研究会、121～158頁。
- 柴垣勇夫 1987 「特殊須恵器の器種と分布」『愛知県陶磁資料館研究紀要』6、愛知県陶磁資料館、11～27頁。
- 妹尾周三 1994 「横見庵寺式軒丸瓦の検討 —いわゆる「火焰文」軒丸瓦の分布とその背景—」『古代』第97号、早稲田大学考古学会、280～308頁。
- 妹尾周三 2005 「安芸の山田寺式軒瓦」古代瓦研究会編『古代瓦研究』Ⅱ—山田寺式軒瓦の成立と展開—、奈良文化財研究所、80～91頁。
- 妹尾周三 2016 「西瀬戸内に伝わった山田寺式軒丸瓦」『考古学研究』第63号第2巻、考古学研究、28～32頁。
- 高橋健自 1920 「鳥形陶器」『考古学雑誌』第10巻第11号、日本考古学会、44頁。
- 武田寛生 2013 「篠場瓦窯跡」『篠場瓦窯跡・上海土遺跡』静岡県埋蔵文化財センター、56～418頁。
- 田澤 坦編 1958 『飛鳥寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所、真陽社。
- 田中 琢・田辺昭三編 1977 『須恵器』日本陶磁全集4、中央公論社、71頁。
- 田辺昭三 1981 「特殊器形の須恵器」『須恵器大成』角川書店、18・19頁。
- 田村充則 2011 「上ヶ原遺跡」『上ヶ原遺跡・上ヶ原第34号古墳 —広島市安佐北区可部町大字中野所在—』財団法人広島市未来都市創造財団、21～65頁。
- 中村 浩 1998a 「高田郡向原町大字坂字奥田山 千間塚古墳」『東京国立博物館所蔵 須恵器集成Ⅲ（西日本篇）』本編、東京国立博物館、67頁。
- 中村 浩 1998b 「賀茂郡豊栄町板鍋山」『東京国立博物館所蔵 須恵器集成Ⅲ（西日本篇）』本編、東京国立博物館、70頁。
- 中村 浩 1998c 『東京国立博物館所蔵 須恵器集成Ⅲ（西日本篇）』図版、東京国立博物館、広島4 PL.68-1・2。
- 中村 浩 1998d 『東京国立博物館所蔵 須恵器集成Ⅲ（西日本篇）』図版、東京国立博物館、広島7 PL.71-7。
- 中村 浩 2001 『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房。
- 中山 圭 2005 「鞠智城出土の軒丸瓦 —朝鮮式山城古瓦の—様相—」『九州考古学』第80号、九州考古学会、45～67頁。
- 名村威彦・野島 永・津牧伸吉 2017 「広島大学考古学研究室所蔵遺物の紹介 —環状瓶と鳥型瓶—」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第9号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、113～122頁。
- 檜崎彰一 1966 「須恵器」『日本原始美術』6、講談社、142～145頁。
- 野末浩之 1995 「特殊須恵器の器種と特徴」『古代の造形美 装飾須恵器展』愛知県陶磁資料館、76頁。
- 翰林大母校博物館 1990 『楊州大母山城発掘報告書』翰林大母校博物館研究叢書4、文化財研究所・翰林大母校博物館。
- 福富町史編さん委員会 2007 「鳥形須恵器と環状須恵器」『自然が語りかける県央のまち 福富町史』広島

県東広島市、43頁。

- 松下正司 1972 『安芸横見廃寺』Ⅰ、広島県教育委員会・広島県文化財協会。
 松下正司 1973 『安芸横見廃寺の調査』Ⅱ、広島県教育委員会。
 松下正司 1974 『安芸横見廃寺の調査』Ⅲ、広島県教育委員会。
 森 正 1990 「阿婆田窯跡群の発掘調査」『京都府埋蔵文化財情報』第36号、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、17～22頁。
 森 正 1991 「阿婆田窯跡群」『京都府遺跡調査概報』第44冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、3～39頁。
 山崎信二 1983 「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 文化財論叢』同朋舎、179～216頁。
 山崎信二 2011 「日本における瓦生産の拡散 - 7世紀中葉から7世紀後半代 -」『古代造瓦史 - 東アジアと日本 -』雄山閣、153～194頁。

Ring-shaped Pottery (*kanjō hei*) - (Vessels with a Ring-shaped Body Made of Tube-shaped Clay): Manufacturing Techniques and Lineages

Takehiko NAMURA

Sue ware (wheel thrown stoneware) was manufactured from the Middle Kofun period on and includes ring-shaped vessels (*kanjō hei*). Their shapes resemble flat water bottles (*sagebe*; hanging bottle) or sake vessels (*hirabe*; funnel-shaped jug, flagon with closed, wide vessel body). This Sue ware was initially thought to yield only from the first half of the 7th century AD in the ancient province Aki (western part of Hiroshima Prefecture), but recently they have been unearthed all over the country. One discovered them not only in corridor-style stone chambers with horizontal lateral entrance from the first half of the 7th century AD but also in kiln sites which are dated between the second half of the 7th century AD and the middle of the 8th century AD. It can be classified into three types according to the manufacturing technique. To distinguish between older and younger types one can make judgements on the basis of the cross sections and decorative patterns of the bodies. The later evolve from circular to quadrilateral ones. Older body patterns also consist of a row of punctations while newer ones comprise wavy line patterns. The most recent ones are undecorated. Ring-shaped vessels were made between the first half of the 7th century AD and the middle of the 8th century AD. Although manufacturing technique and pattern composition changed during this production phase, it indicates that the cultures of the Kofun and Nara periods were not mutually exclusive.